

巻 頭 言

齊藤光實

神奈川大学総合理学研究所 所長

昨年後半から今年初めにかけて建築業界、新興企業の偽造、粉飾の事件が我が国で頻発した。科学の世界でも偽造、捏造の論文が世界中で問題になった。最も耳目を驚かせたのが韓国の ES 細胞の事件であろう。日本でも東京大学、大阪大学などで捏造論文が取りざたされている。いずれの事件も生物科学の分野での出来事であるようで、興味深い。

筆者は生物学の片隅にいて、日本生化学会に属しているが、この学会の研究内容はかなりの程度医学領域に偏っている。年々その傾向が強くなっているように思える。医学は昔は西洋では大学に入れてもらえなかった。技術の一つであると見なされたからである。いまでも米国では医学部ではなく Medical School と云って一見 University から独立しているように見える。法律の Law School と同じである。病気を治すという実際的な目的を持つ医学は応用的にならざるを得ない。この点で Medical School は格は高いが、本質的に歯医者を作る Dental School や薬剤師を養成する School of Pharmacy と変わりはない。

問題は医療に大金が動くことであろう。良く効く薬や治療法は病人を治すという本来の目的以外に大金を呼び込む。日本でも政府の補助金がわかり易い医学がらみの研究に重点的につぎ込まれる傾向がでて来ている。研究者が何億もの研究費をもらおうとどうなるか。補助金に比例して報告も多く求められる。雑誌に結果を公表しなければならない。忙しくなって、研究は雑になって、形だけ整えることになるであろう。そのとき捏造の罟が待ち受けるのかも知れない。

最近問題になる捏造論文が Nature や Science に掲載されたものが多いことも興味深い。職業に貴賤

がないと同様、研究にも貴賤はないはずではあるが、科学雑誌にはれっきとした貴賤があり、程度の高いとみなされる雑誌と、程度の低いとみなされる雑誌がある。マスコミや科学者自身も含めた社会の構成員がそのように認識している。立派な成果は立派な科学雑誌に投稿し、自信の無い結果は格下の雑誌に載せることはどんな研究者も行っていることであり、誰も不思議に思わない。立派な雑誌は人をあつと云わせる結果を進んで掲載する。自然とそうなるのは良く理解できる。捏造はだいたいにおいてあつと云わせる方向に行われるので立派な雑誌に掲載されるのであろう。論文の価値を測ることは本来それほど容易ではないにも関わらず、掲載雑誌のインパクトファクターが論文の価値を教えてくれる。ここに文化と科学との関わりを見ることができる。科学は文化と無縁の存在ではない。

理学部では研究者は応用を考えないことは無いけれども応用が研究の動機にはなる訳ではない。研究費があまり無くてもよく考えて丁寧に研究するのが理学部の特徴であろう。一般的な問題は、成果主義にひた走ることを余儀なくさせられる一流科学者の教養の低下である。捏造論文を防ぐ根本的な解決は科学者の教養による自己規制しか無いであろう。科学とは何かと云う教育もしっかりと行われているようにも思えない。これからの科学教育では教養教育をもっと重視する必要がある。

研究所の年報は昨年から新しい装いで出発した。幸い、ある程度の数の学術論文も掲載することができた。今後とも「Science Journal of Kanagawa University」については総合理学研究所の他の事業とともに所員の皆様、ご関係の皆様のご理解とご支援を賜りたい。

Terumi Saito

Director of the Research Institute for
Integrated Science, Kanagawa University